

入繪

好色一代男

七八尾

好色一代男

卷七目録



四十九歳

五十歳

五十一歳

五十二歳

五十三歳

五十四歳

五十五歳

其の宴六初むしー  
後原存のさる格年

其の初らくあそび  
今のひひひ東好の事

人乃とぬらさるる銀  
親所より快けき事

さす藍二百二十里  
江戸へ系する雄家か子

諸分乃日帳  
新所が村を和あつ子

口をえくさる怪巻  
日ちぢやあつまる

新所の夕暮  
今れさるるもれがさる

其面彩初む

石上姉妹の言移母柱まの懸きまの柱一を丈端をのりて  
解母あいまる目乃ちりはく腰はまのまのまの能  
りてよまの能のまの帯まの能の能の能の能の能  
うの髪乃の結乃物一利長びを丈風義と万丹付て  
今お母前乃の鏡一も能事しは初重乃於俄は重乃  
まのて上林乃ちまの世の正容あてはまの  
二階座あまのて懸物ま白紙と表具一まの  
あまの心のあまのまのえ付れ茶菓子、雛乃行雲  
八天目水籠ま摺乃紋付つる拾の紗一まの道具  
取れまのてたまのる一扇一りて勝より久次郎

字活る唯今降すまの水一乃金義行りまの三花乃  
乃水波やまの道と一入る後く、内容採くまの移視と  
まのて電其まの語まの事まの音座と理み乃  
懸物あまの書乃奇目直まの文同事や中立乃  
乃まのまの獅子踊乃三味線と舞まの法まのまの  
の川てまのまのうのまのまの團あまの竹乃筒斗まの  
花乃の事不思儀あまの合あまのまの丈あまの  
つき合花乃まのまのまのまのまのまのまの  
あまのまのまの移其日乃移事あまの下あまの梅まの白  
あまの三書更乃徳紋あまの薄衣あまの度房とつま  
尾長鳥乃ちまの形髪あまの家あまの金の玉簪と

魁て其内乃風情天津乙女乃妹なりと是を以て尊しと  
前乃志月々々千野利休は父母生道尋らるる一  
能と付れとく生れと破りて都酒の河より  
あぐさ女醉乃まぎまぎ世之反金所銀所紙金打明て  
両乃のみすひたかろ右又裁きやらうと以て申て載  
かまぬ取き一初心なれ女前へ願ひも赤面してぬ  
まゝめ言程とてや子打多ひいをも載まますとそ  
下載くも同一事とて禿と呼ぶをけりぬ物  
しやあそと等とて一其兄年さい川乃世々又  
登一と程乃事笑しと女前も客もいん人の一日

昔昔可なり九左方より尾張乃お宿元程うら四と共  
しき丈のさうらぬぬららまゝしきり何乃因縁  
事乃物集りて我とて移相ながる知れぬ悲しき  
先まのて形もて今つれうら世々女自の淋しき皆自  
転其のつて由きぬ二三度そ小病りして居ぬらる  
盡進せませつと禿と呼んで九左方行す女座前へゆ  
次書取ぬはの居る世々女方へともあつらるる書程  
其まも因縁もなかくびと先す一乃方奥へとせど  
そまも再々を用いぬ内お膝が出来る二階の山とて  
持て所愛ぬめとせむたのくは教持たぬ愛乃女前  
やうにも志らるる事とてやも程意か人ぬあて面



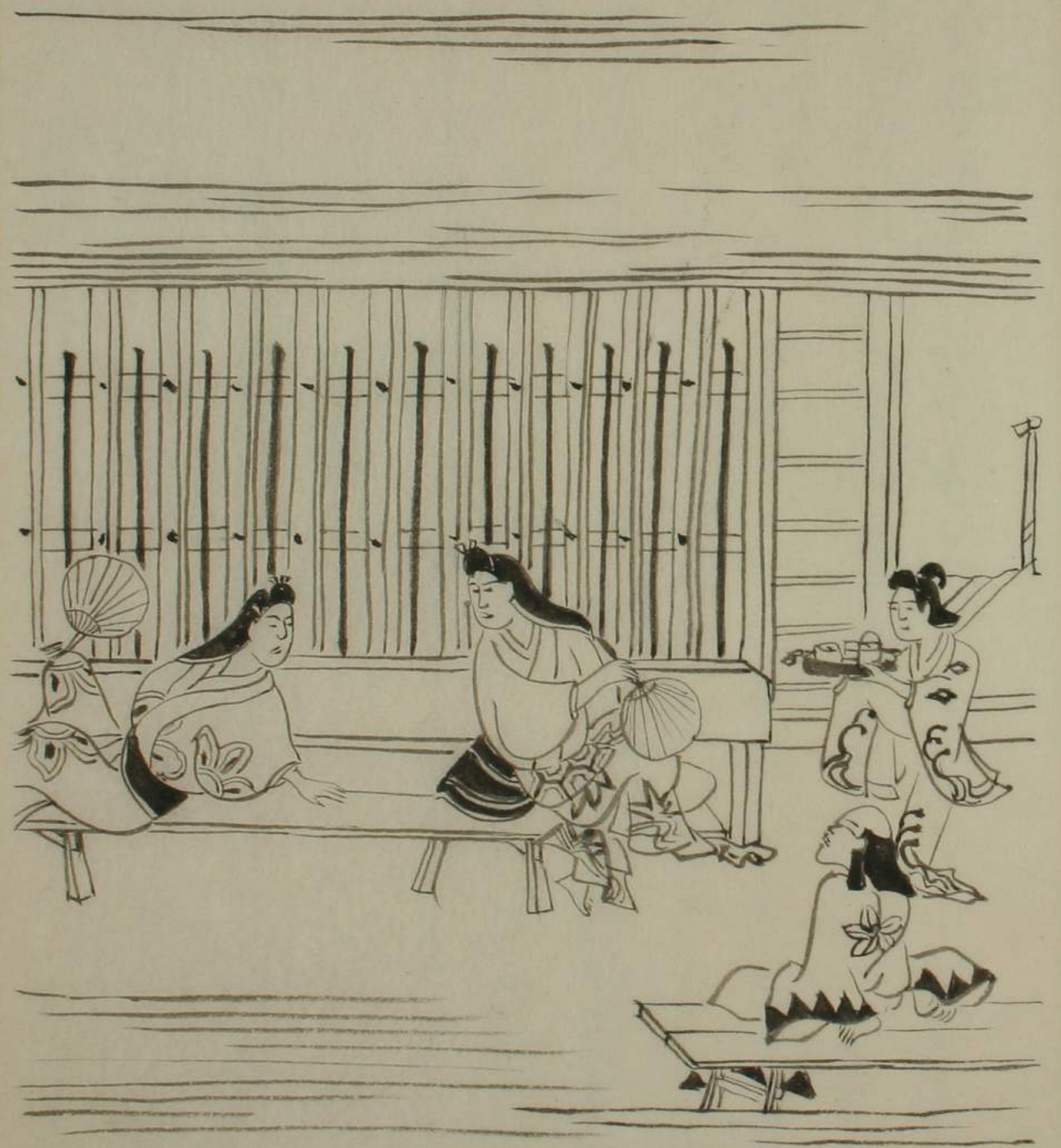


まじき髪め成く下帯と其の尻のまき足九人二階め  
あびて八文字座乃二階め何なりとさつども一町乃なり成  
やめて笑一の事京中乃をぞもめれ奇合きも乃を  
派七柄桐帯め四子切之むーこりめ乃と出せを九座の  
二階より大黒恵美酒と指し出は是と見くかか乃  
めいより懸小網を指きまを座を乃の炮烙め釣籠  
と指し出せ隣より三社乃託宣と指す又むいより  
かか櫃と出は其時あむの懸灯蓋め火とゆいそ  
みせを九座の佛め市乃をせ出せを乃の座より  
釣籠取と出は八文字座より木形板み身乃九座より  
牛房一把をせ思はれ猫め大小指せ出せを于徳め

出せを乃の先め酒油の通いを付く出は派七馬帽  
子とくりし白指し出せをむいより十二文乃包紗と投  
北の指粉木め指さるーまのく出せを南の障子よ  
よる君子なるー業利同日やい乃の取揚海とす  
りまを書てみは乃中乃二階より天蓋籠の  
道具と出せを泣や大袋のや揚座町め其日お魚  
とれめ座も男を乃の寸表め出くあらぬ空成て  
之乃乃二階と派をー古今希成るま是成  
と眞め宗とてまを座とくつ子程め座を大  
道め出くせんまの法まの腰成よりされ乃の



甚山ハい流となく、まきろく面白ク、然成立、等、ま、い、ど、お、し、事  
 形、一、こ、ま、成、今、の、ま、め、志、所、の、程、乃、事、を、何、程、成、大  
 う、一、心、包、背、と、あ、り、て、見、せ、母、と、東、側、乃、中、程、の  
 揚、成、見、世、の、り、ち、更、う、く、ま、み、お、金、成、拾、つ、後、に、西、月、懸  
 と、眼、妙、と、あ、ま、り、一、お、山、成、う、り、て、あ、く、と、小、坊、主、お、付  
 雨、乃、と、と、表、め、者、を、誰、取、り、て、持、者、も、も、只、末、社、乃、會  
 登、一、と、見、く、看、れ、と、石、成、都、乃、人、あ、ら、や、以、称  
 捨、り、が、う、志、く、も、人、お、笑、つ、ま、内、一、入、ま、志、其、成、と  
 ち、ら、の、し、き、紙、屑、拾、ひ、が、集、り、一、つ、も、成、め、序、執



人の志ぬる銀

早く先西隣にまゐりて、高嶋屋乃女子亦呼然と入  
何乃用也、見之其、以、何、書、を、た、き、文、を、懐  
也、一、也、さ、る、ま、り、さ、す、迹、く、い、心、を、事、公、也、  
滝川、也、其、者、に、あ、て、ま、り、区、事、待、事、に、  
そ、ま、り、と、宿、中、停、て、み、れ、ま、す、一、頃、交、所、乃、行、始、也、  
よ、め、事、共、り、た、れ、滝、川、文、乃、の、一、め、に、  
乃、あ、り、又、深、く、今、ま、れ、程、也、書、て、た、く、  
付、一、者、也、是、足、る、は、方、より、  
あ、ち、の、あ、ら、に、付、り、入、物、を、去、る、  
何、を、ま、り、と、拙、者、の、怒、負、原、の、き、  
世、之、女、より、也、

載、合、志、の、ぬ、る、為、て、  
以、物、是、み、し、  
其、文、  
其、  
又、  
人、  
彼、  
け、  
度、  
今、





さす西六十里

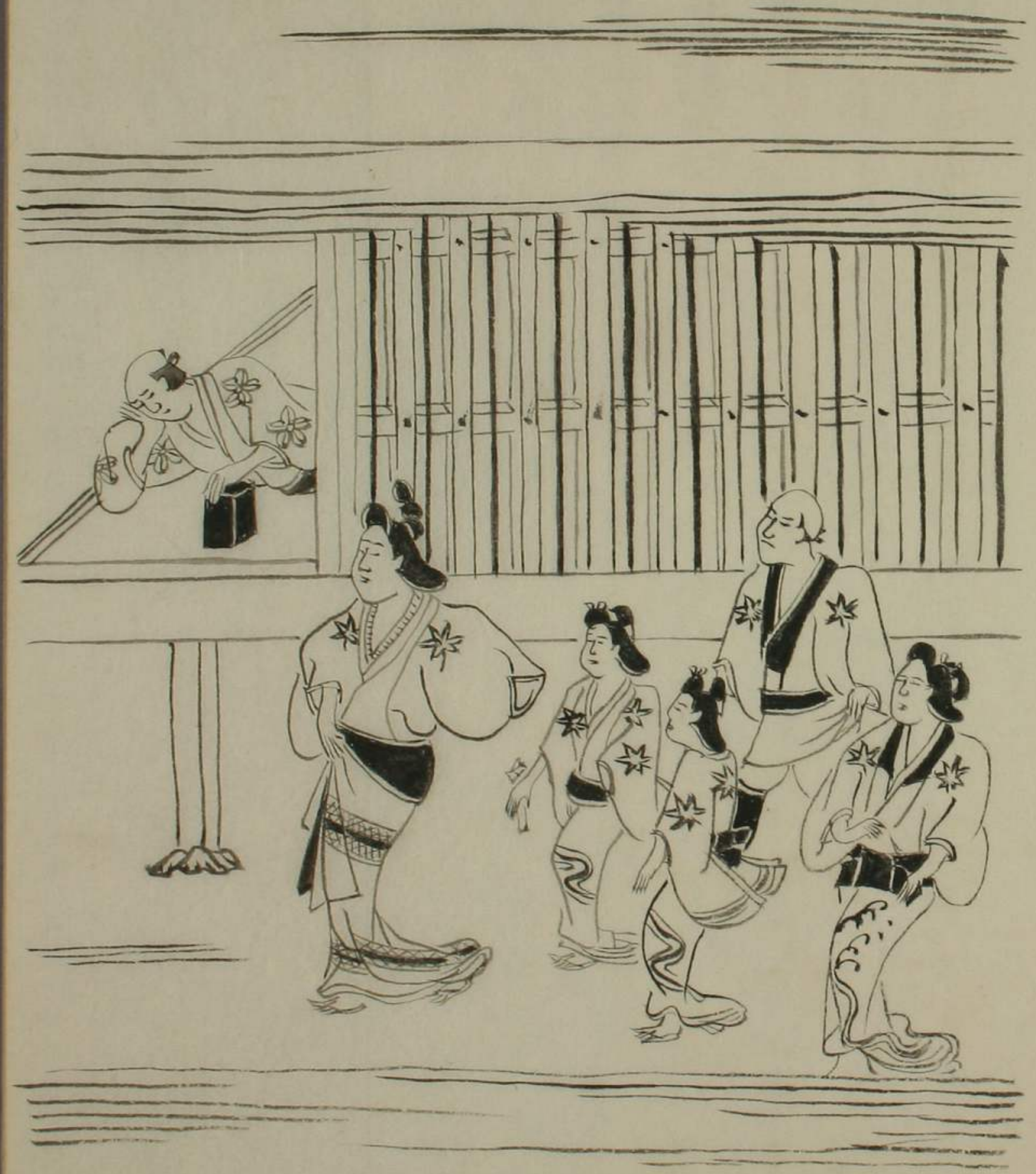
あか村南あま神とぬまの岡山を雄に女部盛成んを  
葉の神の旅衣八人肩の大京物人乃を教持とんと  
出立ぬ陰陽の神をのりつる所は世の程の事なり  
男、女あり日なり行を宇津の山道ぬけけ諸鴻原への  
傳手つかりたれまよ形ぬ三条通の邊の清の寺懸すり  
けりもりくすもるこゝの登壇法は江ノ下へ小はあま  
あつてのやりの都へさす西とて行なり立たが  
かたりぬ岡ぬ東の邊へ京の事なりたれまよく  
またとて真紙ぬ衣をけりぬあまは細たぬ清のあま  
て、やけまこれ染とんせえたこゝへ何程あといふ余

まを度又女部をのりてどと岩根の葛七葉成手  
折て、候初ぬ包ここりて金を又とて渡ぬ人乃者  
たぬく乃相なりくまゝ事の上林のまんぬ首とら成  
よく洗とてあまがたぬと海の大舟にて別して若  
乃法をい道なりまゝ草薙日のあま十園子まきまき  
見ええ振多ぶと越とこゝ里ぬ酒を中へあま是これ  
子乃乃あまの親にの存すく清のあま所へまきまき  
あまの所へぬのせてこゝま待す教らみとらひ  
やまのあまの似成町へあまぬが通らるる所なり  
乃岸付の扇成のてまのあままきまき沙汰なりぬす  
こせよしくたすらるるあまぬがたきしりぬわらぬ

三嶋の松て、松女の跡まてと控し、女あつては是れ是れ  
園乃大を越て、武蔵野の無草の形跡は、武蔵野の古名なり  
つきて、先者名乃由一開し、新板の紋車一、お景三浦れを  
丈と清そのあけり、色めえまり、船の嵐を志し、夜敷ぬさきめ  
け君成、拙めとよ、三人出乃山入、金竜山と目、南舟、浅草川の二板  
立、駒形堂を跡めりし、日本浅めき、鳥り、らら、原三川、  
原、名原乃野三ツ、つめ、身入、三野、中、侍り、又三、夜、を、書、大、心、  
乃、系、原、あり、身、より、代、本、一、清、十、島、と、心、持、揚、を、行、て、上、方、乃  
お、あ、り、中、水、名、比、命、と、承、及、自、然、水、流、成、中、事、と、心、持、公、是  
か、と、禮、障、子、成、明、ま、と、八、景、を、及、乃、小、座、及、方、新、一、く、京、世、と  
ぬ、保、水、流、と、張、れ、て、並、こ、り、か、い、所、と、ま、其、主、は、怒、是、よ、ひ、ま、す

盃乃獨収物挽ま、聖妻友乃つ、紋乃乃、い、事、代、三、ま、を、吏  
と、尋、も、ま、九、月、十、月、兩、月、の、去、所、方、市、左、内、つ、方、え、其、跡、お  
月、中、八、初、乃、方、水、山、入、乃、物、束、手、お、是、三十、日、お、め、水、也、や、く、も、青  
も、空、り、乃、用、乃、水、流、と、て、一、日、も、あ、一、げ、方、水、年、と、及、り、せ、り、  
春、乃、事、ぬ、あ、り、ま、ま、せ、り、中、一、い、は、ま、ま、と、り、ま、ま、て、其、跡、何、者、と、ま、ま  
け、を、小、刺、乃、木、ぬ、り、れ、物、を、海、は、あ、る、物、を、と、ぬ、人、也、世、命、も、は、夜  
つ、つ、い、捨、ぬ、子、兩、乃、光、杯、で、中、く、及、難、一、十、日、二、日、乃、の、取、の、日  
より、活、盡、て、や、り、其、月、の、九、日、ぬ、法、十、郎、事、を、ま、ま、と、り、ま、ま、て、  
盜、り、ひ、と、り、事、ぬ、定、ぬ、志、乃、く、は、右、左、斗、水、供、め、と、り、方、より、降、安、と、み、お  
想、麻、子、唐、織、彭、の、帯、の、胸、の、り、め、で、身、と、存、て、乃、お、海、ま、と、り、方、と、遠、り、  
て、月、中、立、取、物、を、を、付、ぬ、を、言葉、と、意、次、虎、を、對、乃、鳥、物、或、人、引、は、ま、と

やり手の人までも世紋の紅葉を好む山々文西動...  
 と待倦て...  
 世房宗物入を...  
 さし事...  
 事者...  
 我より...  
 世皆...  
 詠...  
 二人...  
 あり事...



諸分乃日帳

う禮しき物其日の男を令ういぬれの中居くあて乃別ま  
下り手好くて居れ日かさの言さ文のやもあり新入らハ  
本村屋乃初の一盛只吉野の花成ん越ん全盛乃春をばり家  
とれ三月三日乃日帳と書てねくら建屋は是ぞ志乃山  
出羽の庄目と云ふ所下りて米りど調て大坂乃舟便之  
まありをてくは里乃事な後ゆきまめと舟ト目切て舟を  
より船乃客中乃鳴乃塩屋乃客たる舟代より登陸カ  
身とて之を橋屋あてあひ初宵乃勒残りて紙等と持た  
杞の度と云ふ所へも舟枕の向の事まきくとよと見  
越す一は勝也隨て成堂の起起まて其めさる中階

西軍をせぬぬ影かどうくくぬ寝ふ公代た目覺て  
くくと呼ばくねも是形なく行水まきこい声と聞て男を  
まきまて侍候辰乃立なき糖ゆくとみえの草屋乃黒安  
とつめらまて又西乃橋河へ也ね毛筆一はぬぬ男是形  
妻の乃物と我ある乃ねるるく宿より史をてゆき  
朝日子のあはは長二日川屋ぬをゆめて肥後乃代乃旅  
一屋ぬ八本屋乃高山伏見屋乃吉州清水乃相見屋と兼て  
浄瑠璃乃行舟成て東乃空に其方地を流出居り舟は  
うー我を世に依と尋ゆく身はをそと教ぬをいぬ  
洞城の初を城跡より見るとは思ひと云ふれま一席也そく  
夢て其ま一得たさ舟杖挑灯の瞿麦今中形ぬと聞



ナリ乃画白声聞遠て見もるまを天満乃又毎々毎々  
程々西守人是之越前殿より多事以て七日は  
うそく成せしき南めて小ざししめりすごと毎日  
西守をみだりしが白紙の吉紙振もいしく養  
三日四日住吉屋長四節方へ出る唐津の庄  
盆としていし客や至り内へ入りし沙汰は  
何れ世貞など手紙を拾ひておぬきまの袖  
四日しき人ぬ五日いしき客や西守のいし男  
一札のあまあまの印此誓紙一枚書しお  
一札のあまあまの印此誓紙一枚書しお  
七日は西守のいし男ぬ

八月を同一度九日母人の  
三日あまあまの子日寺へ右塔と立心  
赤い触れぬか部と申すは十一日折  
屋初る是ハ八右屋の山毎々のいし  
吟味の上あひて三日の宿に存し内  
あそびし硯箱出末中を遣しし和奇乃  
引の松きそあそびし能く筆法  
清い物に文と書まはるるいし  
の肌黒十四日あまあまの思ひ出  
女振あまの懸るは西守のいし男  
何れ子細もあまあまの一日二日

送<sup>か</sup>る<sup>り</sup>乃<sup>り</sup>一<sup>し</sup>其<sup>の</sup>中<sup>ちゆう</sup>一<sup>いっ</sup>步<sup>ふ</sup>五<sup>ご</sup>十<sup>じゅう</sup>は<sup>は</sup>事<sup>こと</sup>何<sup>なに</sup>と<sup>も</sup>書<sup>か</sup>け<sup>る</sup>人<sup>ひと</sup>志<sup>し</sup>望<sup>ぼう</sup>  
 事<sup>こと</sup>毎<sup>まい</sup>あ<sup>ら</sup>ず<sup>ば</sup>其<sup>の</sup>事<sup>こと</sup>明<sup>あ</sup>く<sup>ま</sup>ん<sup>ん</sup>候<sup>こう</sup>せ<sup>り</sup>く<sup>せ</sup>一<sup>いっ</sup>旦<sup>たん</sup>服<sup>ふく</sup>衣<sup>い</sup>た<sup>ま</sup>ふ  
 女<sup>にょ</sup>遣<sup>つか</sup>し<sup>め</sup>只<sup>ただ</sup>身<sup>み</sup>乃<sup>の</sup>事<sup>こと</sup>方<sup>かた</sup>好<sup>この</sup>む<sup>む</sup>か<sup>か</sup>る<sup>る</sup>女<sup>にょ</sup>愛<sup>あい</sup>せ<sup>り</sup>ん<sup>ん</sup>か<sup>か</sup>り<sup>り</sup>  
 之<sup>この</sup>事<sup>こと</sup>逃<sup>に</sup>げ<sup>る</sup>事<sup>こと</sup>推<sup>おし</sup>し<sup>め</sup>る<sup>る</sup>事<sup>こと</sup>詔<sup>みことづ</sup>す<sup>す</sup>書<sup>か</sup>き<sup>け</sup>る<sup>る</sup>也<sup>なり</sup>泪<sup>なみだ</sup>  
 く<sup>く</sup>ま<sup>ま</sup>く<sup>く</sup>語<sup>ご</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>面<sup>おもて</sup>影<sup>かげ</sup>う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>涙<sup>なみだ</sup>は<sup>は</sup>今<sup>いま</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ず<sup>ず</sup>京<sup>きやう</sup>  
 法<sup>はふ</sup>合<sup>ごう</sup>極<sup>ごく</sup>り<sup>り</sup>大<sup>だい</sup>坂<sup>さか</sup>は<sup>は</sup>は<sup>は</sup>ま<sup>ま</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>乃<sup>の</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>と<sup>と</sup>鳴<sup>な</sup>色<sup>いろ</sup>も<sup>も</sup>中<sup>ちゆう</sup>  
 此<sup>この</sup>事<sup>こと</sup>一<sup>いっ</sup>林<sup>りん</sup>一<sup>いっ</sup>と<sup>と</sup>京<sup>きやう</sup>の<sup>の</sup>む<sup>む</sup>じ<sup>じ</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>我<sup>われ</sup>の<sup>の</sup>事<sup>こと</sup>  
 の<sup>の</sup>け<sup>け</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>六<sup>ろく</sup>通<sup>つう</sup>舟<sup>ふね</sup>死<sup>し</sup>す<sup>す</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ず<sup>ず</sup>也<sup>なり</sup>と<sup>と</sup>見<sup>み</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>事<sup>こと</sup>  
 四<sup>し</sup>足<sup>そく</sup>五<sup>ご</sup>足<sup>そく</sup>行<sup>ゆ</sup>き<sup>き</sup>音<sup>ね</sup>一<sup>いっ</sup>て<sup>て</sup>お<sup>お</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>る<sup>る</sup>跡<sup>あと</sup>見<sup>み</sup>得<sup>え</sup>る<sup>る</sup>消<sup>しょう</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>是<sup>こゝろ</sup>  
 ま<sup>ま</sup>が<sup>が</sup>わ<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>な<sup>な</sup>ら<sup>ら</sup>ず<sup>ず</sup>と<sup>と</sup>は<sup>は</sup>信<sup>しん</sup>の<sup>の</sup>捨<sup>すて</sup>難<sup>がた</sup>一<sup>いっ</sup>と<sup>と</sup>二<sup>に</sup>事<sup>こと</sup>の<sup>の</sup>難<sup>がた</sup>皮<sup>かわ</sup>  
 の<sup>の</sup>色<sup>いろ</sup>里<sup>さと</sup>小<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>事<sup>こと</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>



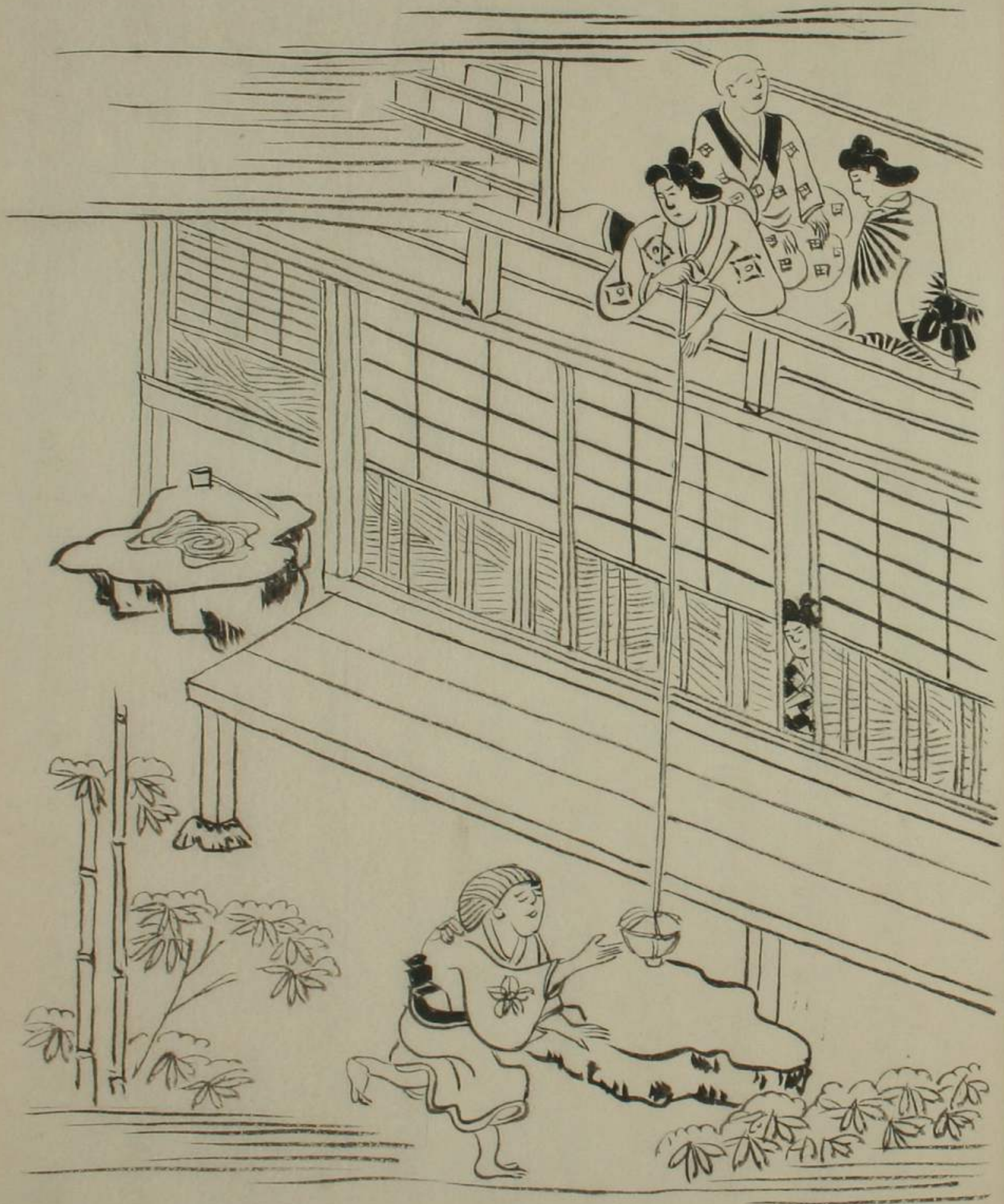
以流て酒狂電

愚六三河志乃通りなごのり一ぼり一金性乃男乃  
きれげう福三百兩乃金也音毒清出い流け首尾  
待量乃出近き一里おひえて流計終果乃常一是ど  
う終一くふてあらざるさあらんのかまひりてまゝなる身  
乃ゆき末成致まぬ世々々々一かりせ一車と志まはる毒並  
一で刺力乃おふま一車をあて一も一きく一堀一乃  
若愚乃うき一と我の性心おそま孫其恩乃罪 陸油  
かこ一 只名乃まぬ死まぬめか胃法く一性愛乃春花の  
志何乃一とく湯水をま川てい流とく 延室乃手乃女  
八日乃曙お空一くかりぬ情おはをまおらるご一あらく

物乃くくまかしく行義りんと一て座おけえま他も  
胎子之立度 禿乃私語事もろくとろろ乃文も人乃目成  
志のむはげり魚い懸りとはい書て其日乃敵の心成るひは  
まて初乃乃出合あな張一座と加あまご叶ぬ用事  
あそ前載おけりて萩乃神臣と物静し詠りてお  
お衣のりりお一やの板の戸唱れと音せは下地  
寓りり印と眼子まき向紙と情まおらる一て出は  
座敷お志とくくはは葉山乃も一性様子何りお  
名は一い流とく一水けひて其板一焼すお  
とめてな成流しとせ身持のくけりそ身物なり  
常とけ人勸乃介の志まて一人おまを揃せ度まで

客より只の身取れゆく御も所詣あ引込をて  
其の身取れゆく御も所詣あ引込をて  
まてれもひしゆに其の二とせりし世之を深なる中其  
越後所乃或宿乃口鼻にうりて度敷論乃は本邦ま  
安乃を方巨智乃活衣勝り下の一重をや乃行由進  
そつてみゆが捨行水乃内裸身乃れぬ久米乃仙を念  
事成るし、志木乃戸也衣ぬ立志乃よと釣行炬光と並  
志あしそまをこと内義か押しせりぬこひつ湯殿し  
ゆりてふある乃せりまゆぬちまき物してゆはすよす  
足付しまて悲しゆ振くはつたぬらんかゝらぬ物束  
すたけしそまをことひそめては毎日記しゆわらき

西事もや銀けり上買今世月ひに雲氣乃やぬたし  
ゆれ其の手にのる月ひに月九軒乃紙屋ぬ手跡乃ゆれば  
ぬあんとそまをことひそめては毎日記しゆわらき  
小身のひしゆ振をみまふ久都とゆふ度ひと強てを又  
振乃お伽をせりしゆりて古座もをぬしゆと大事と  
まあまぬをせりしゆりて古座もをぬしゆと大事と  
雲袖成もゆい量踏石乃上りて列下駄と枕ぬ凝えてい  
はとちゆまゆもむしゆひぬ下度友の床、扇を乃けりは馬  
深乃人と寢覚ぬ降み成咽て下駄と、毛ぬとけりは  
此をすまぬ極乃下ぬ院まぬ世々々西教をもんて下駄  
ぬれまをぬしゆりて古座もをぬしゆと大事と

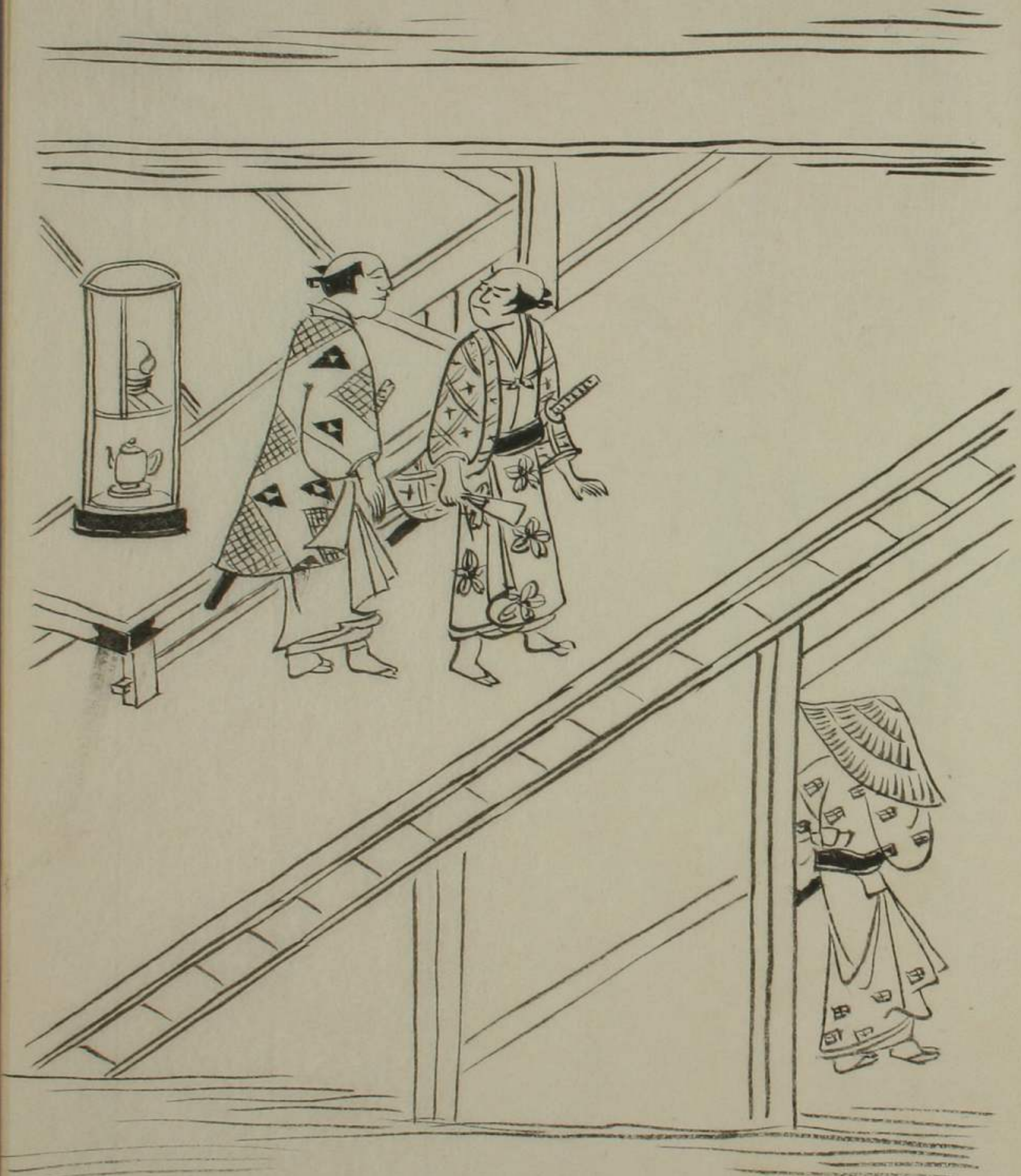


此時乃う程しきは若七代より左史雲加ありとを形三階  
ゆ久都より乃れ下り下り吟味をなれど懼し吉集  
ちんき乃斤手ゆ文九引ききくつんせりゆてしきき切  
二成は懸天目乃そ暑間酒をほほ我居てるく又わ其世  
心入を懸下三度載唯通る此樂ふ代を徑ゆ事なる  
引て息をとり照らけ付流山柳二房者は是れ小色成て流る  
又おし支よりなる三階ゆ世を成りて久都ゆ余は電り引  
坊ゆは胸のうへとさすまきくさき一り今あまはぬてたて其下  
其下とひんぎんぎんやうて久都きりゆゆ若妻か思目成  
そそ色即しはは葉目乃えぬ者二やちぬ佛行有難き方  
支ゆ乃黄金はととらんとすのて若月小の客立りゆません



存ぞとぞのむまひつゝ志業折らぬ焼味曾たつくは碎  
乃ちちめ文野まんやも跡ぬ渡乃小橋の芳こりて鳥羽乃感  
塚合鳥下や目覚ん一ねあゝ四塚乃茶庭のむをてけく  
きき起して陽まをまき下し身がまきく水乃せせと下く  
聲くわし伝は誠み一とせ本希道とそと駕籠者  
殺せ一野辺もはけりそとねやい合乃空ゆりく星乃  
らすま成は魚丹は口乃小岳方舟行を船師乃人侍  
只水斤見せりやて起出たり是れめ度下し水乃のり  
高橋板もまちひさしきとま乃のを信らましあはんは  
ますてぞ移るも一まをいをきくまを出乃茶庭  
はとんくもや三文字有ぬ人々やたけは於詠乃たけり

西行の何為例て杉鳩乃曙明渡のり空成答はけり我  
之乃六新町のきと見捨其目成すくぬら鴻原の  
於明ごまの唐めをけりくま世をなさんとむと茶庭に  
是乃河の方舟立り是れ茶庭乃行燈消明てぬ物きび  
とた金もそとて若倉乃松茸と焼て申候ぬや河  
成是ていつに影跡仙は合乃身清潔も人乃物とそと  
ぬ自もたは名強も合なり何れへと一舞は我巻て計  
云捨別ま侍はがらん乃字座へいへまとあぬ事と六角  
堂乃葉はけり行人もとせをぬぬを夫乃河史  
引舟の對馬三芳去依れど宿よりは流まぬ其外男  
福儀して只あまを茶のどく人杉無難なる指合乃



以威勢也<sup>いけいせい</sup>は時方<sup>ときかた</sup>お振<sup>おび</sup>大名<sup>だいめい</sup>もあんか物<sup>もの</sup>成<sup>なり</sup>一<sup>いつ</sup>足<sup>あし</sup>度<sup>ど</sup>  
 十川<sup>じゅうせん</sup>の多<sup>た</sup>外<sup>がわ</sup>とあつし<sup>あつし</sup>一<sup>いつ</sup>考<sup>こう</sup>より<sup>より</sup>たす<sup>たす</sup>か<sup>か</sup>林<sup>りん</sup>札<sup>さ</sup>とあ<sup>あ</sup>成<sup>なり</sup>  
 ませ九月十日の月も<sup>つき</sup>は<sup>は</sup>津<sup>つ</sup>津<sup>つ</sup>都<sup>と</sup>の風<sup>かぜ</sup>候<sup>こう</sup>言<sup>こと</sup>稿<sup>こう</sup>野<sup>の</sup>風<sup>かぜ</sup>志<sup>し</sup>質<sup>しつ</sup>を<sup>を</sup>加<sup>か</sup>  
 野<sup>の</sup>世<sup>よ</sup>花<sup>はな</sup>之<sup>の</sup>分<sup>ぶん</sup>が<sup>が</sup>か<sup>か</sup>一<sup>いつ</sup>さ<sup>さ</sup>對<sup>たい</sup>馬<sup>ば</sup>之<sup>の</sup>利<sup>り</sup>教<sup>きょう</sup>三<sup>さん</sup>一<sup>いつ</sup>古<sup>こ</sup>依<sup>い</sup>は<sup>は</sup>津<sup>つ</sup>津<sup>つ</sup>大<sup>だい</sup>酒<sup>しゅ</sup>  
 能<sup>の</sup>を<sup>を</sup>ひ<sup>ひ</sup>一<sup>いつ</sup>さ<sup>さ</sup>一<sup>いつ</sup>夜<sup>よ</sup>夜<sup>よ</sup>そ<sup>そ</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>一<sup>いつ</sup>め<sup>め</sup>笑<sup>わら</sup>ひ<sup>ひ</sup>せ<sup>せ</sup>か<sup>か</sup>何<sup>なに</sup>も<sup>も</sup>も<sup>も</sup>成<sup>なり</sup>目<sup>め</sup>り<sup>り</sup>  
 懸<sup>か</sup>き<sup>き</sup>奥<sup>おく</sup>加<sup>か</sup>め<sup>め</sup>う<sup>う</sup>な<sup>な</sup>つ<sup>つ</sup>を<sup>を</sup>志<sup>し</sup>の<sup>の</sup>う<sup>う</sup>る<sup>る</sup>事<sup>こと</sup>を<sup>を</sup>ね<sup>ね</sup>ね<sup>ね</sup>の<sup>の</sup>に<sup>に</sup>さ<sup>さ</sup>せ<sup>せ</sup>  
 事<sup>こと</sup>乃<sup>の</sup>が<sup>が</sup>一<sup>いつ</sup>世<sup>よ</sup>乃<sup>の</sup>か<sup>か</sup>一<sup>いつ</sup>成<sup>なり</sup>夜<sup>よ</sup>夜<sup>よ</sup>の<sup>の</sup>教<sup>きょう</sup>と<sup>と</sup>一<sup>いつ</sup>さ<sup>さ</sup>て<sup>て</sup>か<sup>か</sup>ハ  
 万<sup>ま</sup>あ<sup>あ</sup>さ<sup>さ</sup>さ<sup>さ</sup>も<sup>も</sup>成<sup>なり</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>文<sup>ぶん</sup>と<sup>と</sup>一<sup>いつ</sup>本<sup>ほん</sup>と<sup>と</sup>ね<sup>ね</sup>め<sup>め</sup>を<sup>を</sup>三<sup>さん</sup>の<sup>の</sup>南<sup>なん</sup>園<sup>えん</sup>を<sup>を</sup>ね<sup>ね</sup>お<sup>お</sup>い<sup>い</sup>  
 枕<sup>まくら</sup>も<sup>も</sup>常<sup>じょう</sup>なる<sup>なる</sup>夜<sup>よ</sup>夜<sup>よ</sup>を<sup>を</sup>も<sup>も</sup>行<sup>い</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>物<sup>もの</sup>も<sup>も</sup>な<sup>な</sup>か<sup>か</sup>一<sup>いつ</sup>ら<sup>ら</sup>さ<sup>さ</sup>常<sup>じょう</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>  
 万<sup>ま</sup>事<sup>こと</sup>一<sup>いつ</sup>つ<sup>つ</sup>は<sup>は</sup>流<sup>りゅう</sup>め<sup>め</sup>即<sup>すなはち</sup>身<sup>み</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>う<sup>う</sup>せ<sup>せ</sup>た<sup>た</sup>ど<sup>ど</sup>ニ<sup>に</sup>毛<sup>もう</sup>手<sup>て</sup>で<sup>で</sup>一<sup>いつ</sup>流<sup>りゅう</sup>守<sup>しゅ</sup>極<sup>ごく</sup>及<sup>およ</sup>ば<sup>ば</sup>是<sup>これ</sup>  
 人<sup>ひと</sup>か<sup>か</sup>さ<sup>さ</sup>せ<sup>せ</sup>ら<sup>ら</sup>ま<sup>ま</sup>さ<sup>さ</sup>一<sup>いつ</sup>ま<sup>ま</sup>か<sup>か</sup>と<sup>と</sup>を<sup>を</sup>一<sup>いつ</sup>開<sup>ひら</sup>け<sup>け</sup>命<sup>いのち</sup>で<sup>で</sup>一<sup>いつ</sup>借<sup>か</sup>借<sup>か</sup>を<sup>を</sup>一<sup>いつ</sup>成<sup>なり</sup>成<sup>なり</sup>み<sup>み</sup>事<sup>こと</sup>成<sup>なり</sup>



好色一代男

卷八目録

五十六歳

藤原の寝乃車  
末社（末社）神楽の事

五十七歳

信乃（信乃）かき所  
江戸小町（江戸小町）さき事

五十八歳

一盃（一盃）さいて  
後原（後原）より侍事

五十九歳

長崎（長崎）丸山の事  
長崎丸山（長崎丸山）の事

六十歳

床（床）のせめ道具  
女（女）護（護）乃（乃）侍（侍）乃（乃）事

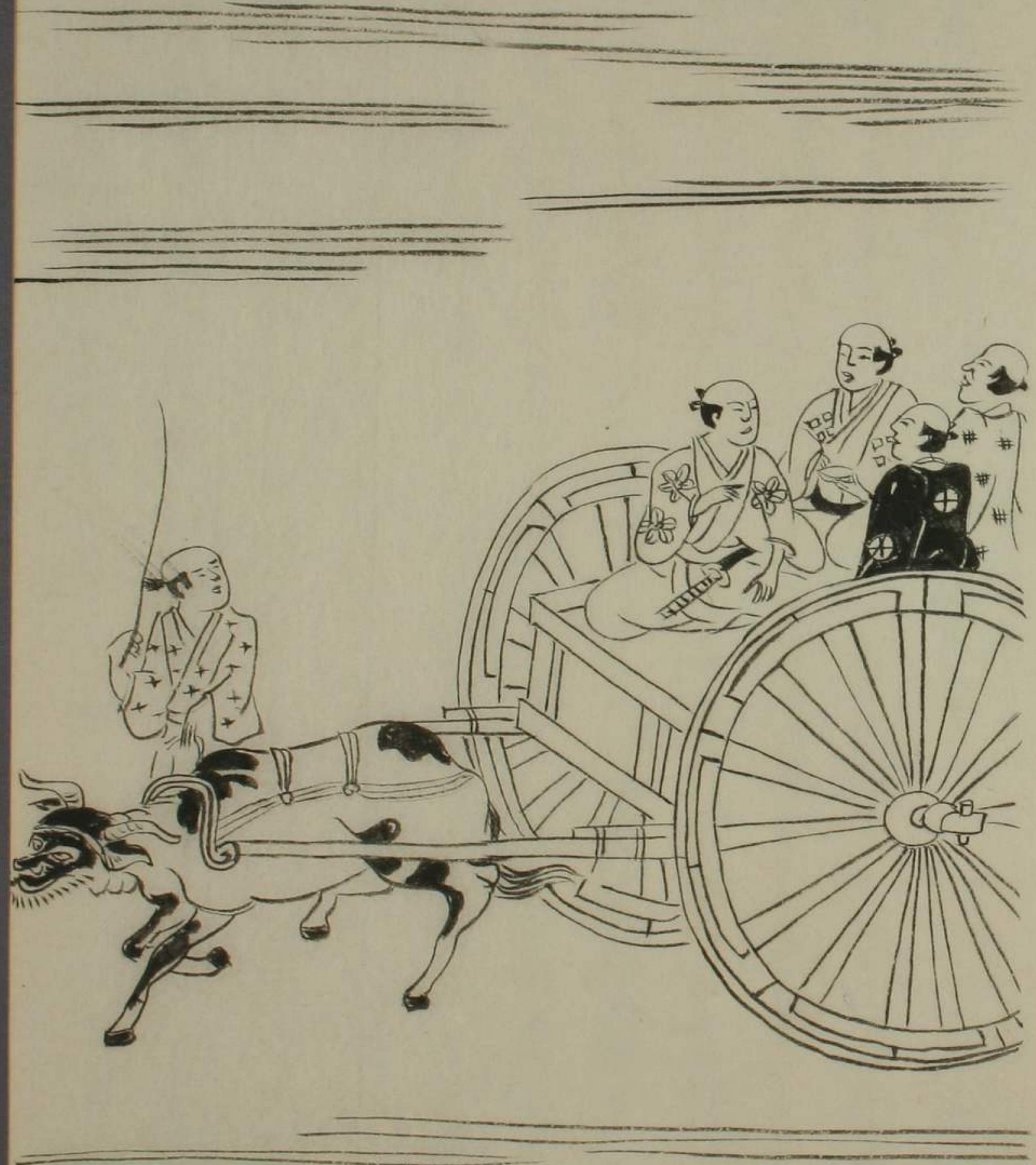
寝る夜車

人乃内みかかろく夜死強ひて居る海女とら世世物み  
かまをぬぐうとて松針乃山女も松針も守  
物乃自由成こし寝え揚屋とて事むし誰  
たどりて夜乃着ふたれたる乃み夜をひり  
津去成望守まの志まぬと娘あふり  
丸屋乃口鼻と末社河川まて  
又とあすとと神系より出  
毎日往く空言成神持あふ  
とら昨日二十九日人の  
宮あしと道も酒も飲ま  
一取み吐

系と新車と那世及女乃智恵を中間  
まじりて行人づれへ入  
中せし手代めをま  
より兩乃多然成河  
心得くそまやハ  
是か初尾と金子十  
水念心をうり  
まくと鳥羽舟  
種とあつせと夫  
唐子に縮緬乃投  
のりて一調あ  
折重  
枕箱  
梶  
大

蠟燭を立出口の門よりちや引懸け無かり  
たしさの末雀乃細道すまを大に通と南が  
一層のいせ行内裏様乃困なきに在余死で  
たれ事うと難くか下りて寒風月乃出  
まを見そは行田乃急末ぬぬ乃通の袖  
た乃はうとありてなちぬ洞うとてれもまに手  
音もと向うのけり願まきとて氣背かりき南と  
見まぶ小井四乃及檜の造ぬ松灯ひりてを川へ  
皮里乃紋敷一是をまきけぬ左支ぬがより  
た乃く抱え送りて愛めくまて進せまをひと  
修り終とやり自九人車と先て風林乃松敷

寒乃々那一ぬ京より以川の蒲團もせせ  
草此戸乃内ぬ火燈と位懸くぬ枕も  
里て愛ぬ一寝入るぬ愛成す先て銀乃  
間端ぬ名酒の敷く本奥二一酒元の茶漬ぬ  
一層乃板焼ぬ赤鯛と墨合志何し  
事どそり愛く跡ぬめいしく香乃色服紗香  
はて乃煙草盆いほまら乃これ取も一  
た手内ぬ鳥ぬ水事とそ出来侍ぬ大形  
ぬ水あら乃付合下と文三の河乃沙礼ハ  
中よと一と又車ととぬめいしく世之介  
今宵乃張走身ぬのま川てよ海と一何の款



成身事乃あり也唯今きくめくひて孫七、  
 日中一乃饒民ありとちそまきつて三早六一川  
 と五身宛あしつて上成金銀めごとそ其殺九  
 百二匹住能登み中けけ、使伴めこ一匹え  
 させ、左又九人乃方へ送りしつてせまのむを報り  
 も所土産めとてちいさき弓矢め、樞氏將來  
 乃守候とろく行末ながく、西息吳め身つがり  
 も控をさす、ち船の十より卯み年切まて、  
 西勤乃うちめは音もなきやうめとちて、左又さめ  
 以て進上中、ち成所祈念乃、西め、島長久

晴乃が巻終る

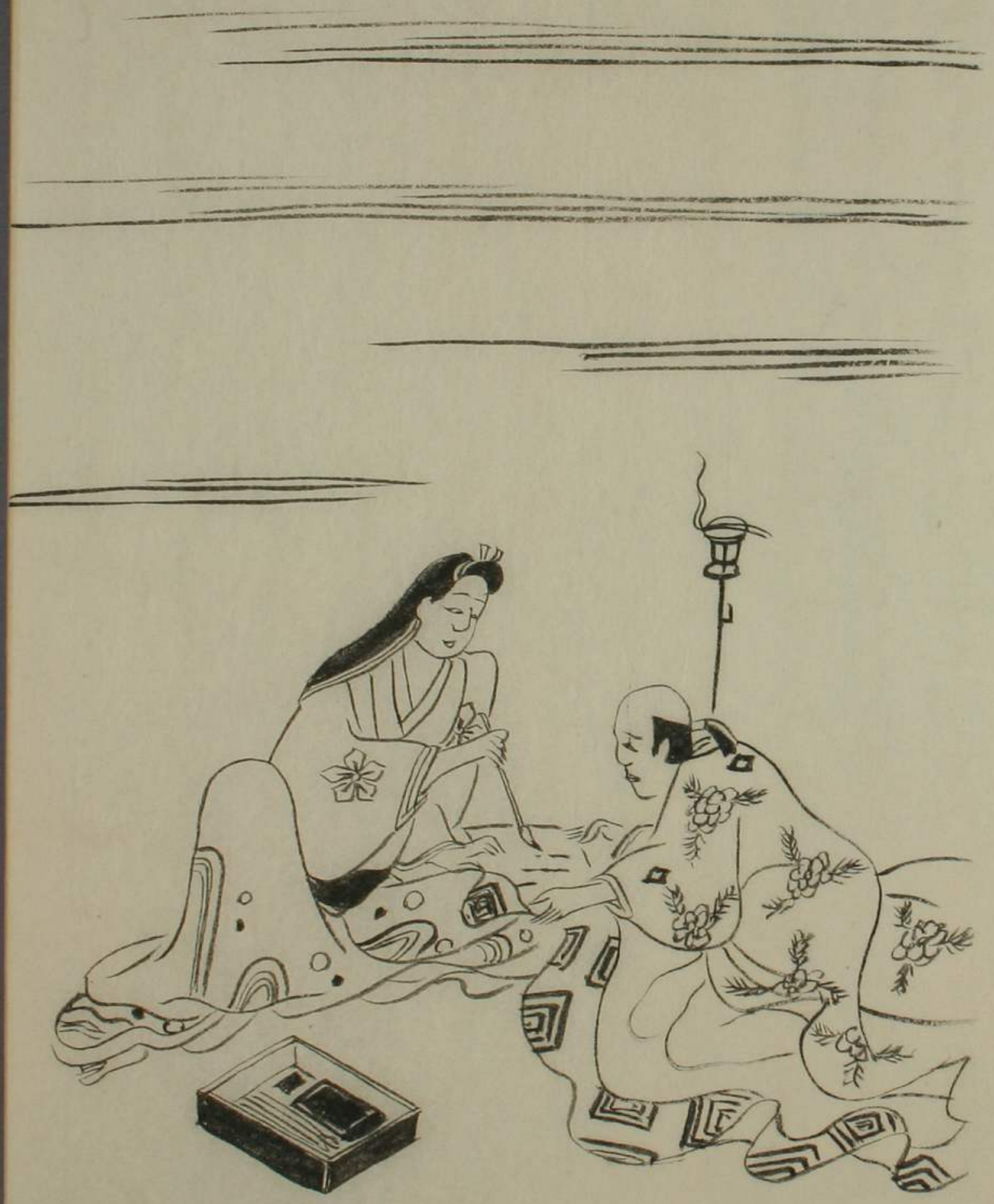
其の御子 其の御子と三条乃揚母とせ 賊布の流いてゐる  
今も一いつけと声聞く 小者の中付て世之  
分振りが賤乞女来す 俄に江戸へ下り乃  
あつて日東目鳥 仕立物屋乃十数と以て其の立  
たつて此見舞中へ追付無乃有りませと  
取あつて次路銀などとまゝに門に申出紙紙よび  
取してはきびの何乃と申下れと以てまゝに小  
さきさぬ母あひまゝに物對面うらゝとく  
あつてまゝにいと智恵自慢申し 去り乃  
在日流の字其出と同付申し 晴乃が巻終る

江戸へよ絲粉のめよと申す 其の御子とせ 縁本  
其の御子とせ 縁本と云く身とそがふりまゝに  
屋町乃下在後と申す 其の御子とせ 縁本  
まをいと縁の色まゝに申す 其の御子とせ 縁本  
次と申す 其の御子とせ 縁本と申す 其の御子とせ 縁本  
と申す 命の御子と申す 其の御子とせ 縁本  
まはの御子と申す 其の御子とせ 縁本  
うらゝと申す 其の御子と申す 其の御子とせ 縁本  
さぬかゝと申す 其の御子と申す 其の御子とせ 縁本  
念して未定めたり 其の御子と申す 其の御子とせ 縁本  
無きと申す 其の御子と申す 其の御子とせ 縁本

とく〜 唯今もいさみ〜 涙がこがす〜 是二無何衆同  
道一で下り人を〜 都の風情も〜 宗物〜 一石えを  
十石成百連と下りぬ本町四丁目のお店つ〜 十石字  
兵衛と信立吉宗一は〜 首尾ある〜  
揚屋利ある好尋糸より活状つ〜 十石と豆  
大長と中〜 一石と一石〜 中義四  
日乃中と後合見成定て〜 家村江戸あかし〜  
物よ〜 亭主一石〜 宇兵衛の度〜 金の  
出〜 やう〜 金の〜 程京て乃仕出

人乃重寶成物と〜 上書め古紙と記次明て〜  
筋の要目釘竹針三枚乃糸餅粘耳接うち密枝  
七色あり代三文めんと足人乃〜 切取物と〜  
事もせ成あ〜 連て〜 其度物集日集て〜  
白あひて酒を〜 浴う〜 十石〜  
きぬ一川〜 押し〜 膝〜 打籠  
うんと〜 形つ〜 ち〜 一〜 度  
立〜 行水〜 湯殿〜 せん〜 少  
肌白輪子中〜 麿子乃い川〜 上六浦黄八丈乃八端  
熱石〜 又上乃女扇のせぬ事也用〜 总物  
掃〜 事〜 初〜 寝乃鼻〜 出

左丈寢<sup>ね</sup>之<sup>の</sup>後<sup>のち</sup>びて十<sup>じゆ</sup>花<sup>はな</sup>を呼<sup>よ</sup>んで志<sup>し</sup>みく<sup>く</sup>と如<sup>ごと</sup>く懸<sup>けん</sup>常<sup>じやう</sup>と  
 きて、とせて心<sup>こゝろ</sup>よく物<sup>もの</sup>を初<sup>はつ</sup>め首<sup>くび</sup>尾<sup>び</sup>乃<sup>のち</sup>志<sup>し</sup>る<sup>る</sup>一<sup>いつ</sup>めと硯<sup>いん</sup>  
 取<sup>と</sup>りて十<sup>じゆ</sup>花<sup>はな</sup>を身<sup>み</sup>ま<sup>ま</sup>せ<sup>せ</sup>何<sup>なに</sup>の傍<sup>はた</sup>を魚<sup>いさな</sup>一<sup>いつ</sup>と下<sup>した</sup>常<sup>じやう</sup>め  
 端<sup>はなは</sup>書<sup>か</sup>して、む<sup>む</sup>さ<sup>さ</sup>き筆<sup>ふで</sup>と當<sup>あた</sup>りて一<sup>いつ</sup>竹<sup>たけ</sup>枝<sup>えだ</sup>を  
 かやうの事<sup>こと</sup>なり、定<sup>じやう</sup>無<sup>む</sup>常<sup>じやう</sup>不<sup>ふ</sup>思<sup>し</sup>儀<sup>ぎ</sup>め<sup>め</sup>に宿<sup>やど</sup>め<sup>め</sup>屏<sup>びやう</sup>て  
 如<sup>ごと</sup>く世<sup>よ</sup>之<sup>の</sup>人<sup>ひと</sup>の如<sup>ごと</sup>く福<sup>ふく</sup>く尋<sup>たづ</sup>ね<sup>ね</sup>もま<sup>ま</sup>ぶ、やうに足<sup>あし</sup>を<sup>を</sup>め<sup>め</sup>は<sup>は</sup>に  
 き<sup>き</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>人<sup>ひと</sup>と賭<sup>か</sup>め<sup>め</sup>一<sup>いつ</sup>遣<sup>はな</sup>し<sup>し</sup>を<sup>を</sup>ね<sup>ね</sup>と、さ<sup>さ</sup>は<sup>は</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>る<sup>る</sup>足<sup>あし</sup>  
 十<sup>じゆ</sup>花<sup>はな</sup>も<sup>も</sup>川<sup>か</sup>へ、先<sup>ま</sup>き<sup>き</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>乃<sup>のち</sup>人<sup>ひと</sup>懐<sup>なつ</sup>も<sup>も</sup>め<sup>め</sup>一<sup>いつ</sup>何<sup>なに</sup>んか  
 男<sup>おとこ</sup>め<sup>め</sup>あ<sup>あ</sup>さ<sup>さ</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>す<sup>す</sup>一<sup>いつ</sup>ま<sup>ま</sup>を<sup>を</sup>以<sup>も</sup>て<sup>て</sup>世<sup>よ</sup>之<sup>の</sup>人<sup>ひと</sup>横<sup>よこ</sup>に<sup>に</sup>然<sup>しか</sup>  
 ら<sup>ら</sup>何<sup>なに</sup>も<sup>も</sup>隠<sup>かく</sup>し<sup>し</sup>を<sup>を</sup>魚<sup>いさな</sup>一<sup>いつ</sup>京<sup>きやう</sup>より<sup>より</sup>足<sup>あし</sup>を<sup>を</sup>く<sup>く</sup>り<sup>り</sup>め<sup>め</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>  
 下<sup>した</sup>ま<sup>ま</sup>す<sup>す</sup>一<sup>いつ</sup>其<sup>その</sup>跡<sup>あと</sup>を<sup>を</sup>く<sup>く</sup>ら<sup>ら</sup>ま<sup>ま</sup>す<sup>す</sup>も<sup>も</sup>違<sup>ちが</sup>は<sup>は</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>心<sup>こゝろ</sup>め<sup>め</sup>た<sup>た</sup>女<sup>め</sup>是<sup>これ</sup>  
 也<sup>なり</sup>



一盃とて是聖

雅波男其眼物とて乃をぬりて室町ぬりて  
をまじりて酒とて世に合はるる寺をぬりて東寺の  
市新保いざと誘ひたれ其旨乃亭主六市出入り  
紙屋の吉女五人前とて一に之を畜生門乃をぬりて  
うらせとて誠め佛法乃登りり人ハ八日乃とて  
誰一人も世ぬとて多へとてなり見んさう乃ひて  
物推草花とめく飲無ありぬらぬいぬりて  
いば事も酔ひて立さぬぬ世に合はるる亭主ぬりて  
あさめとて以て所意攻手と載て一川流れた酒  
常もあてて是てのまなぬぬ酒とてぬりて

又調ゆ遣一車新しくく懐極を始出

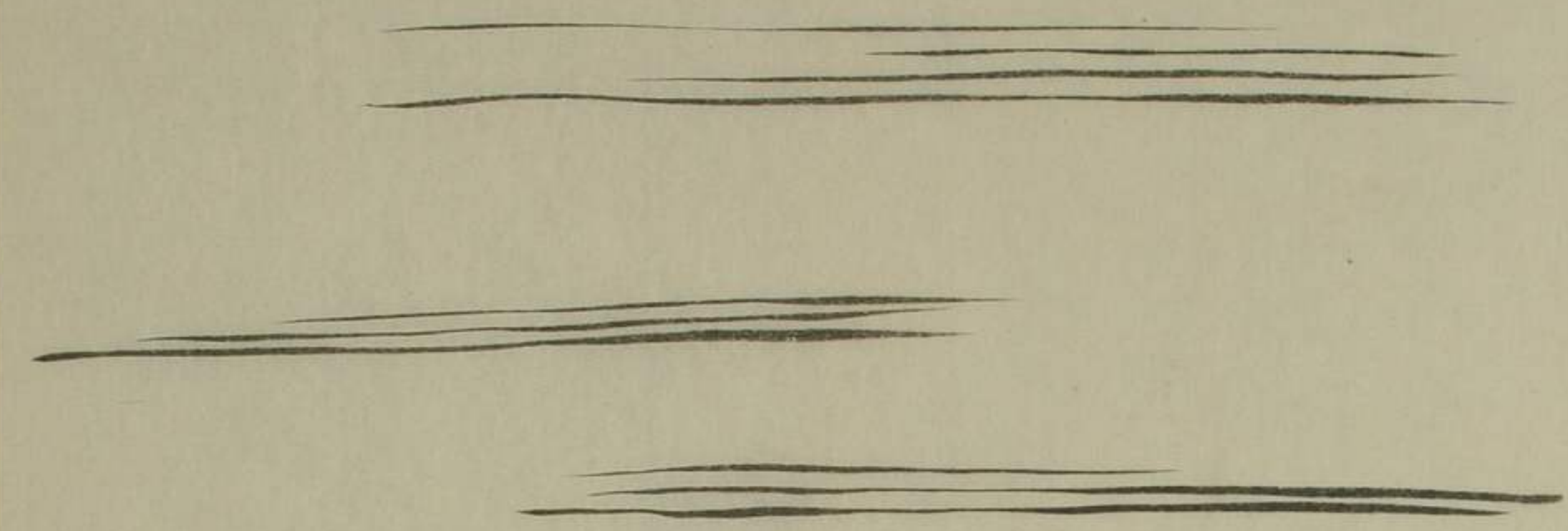
主人ゆり夢ぬかりぬけまゝ歸に酒進原玉を  
く尤とハ文字在ぬゆきて所執者子人でも呼  
と中せと紋日乃事なまゝ名所一人もあて  
たまへてうぬて神取集とて是でも守りぬ  
そや身开ふとそあま大坂乃か客ぬすぬ乃  
酒も淋しき事乃たうてうら酒とて古更乃ら  
まゝひ懸き花ならぬ表たる北乃所方出らぬて  
大坂よりたぬりて  
古更ぬ今日水揚ぬりて九在七乃方ぬ出たうさ  
まゝく酒座りて守りて唯今酒内権三りて



是め六様子<sup>やまご</sup>行りて、まじひにたりそ、女<sup>メ</sup>の座<sup>ざ</sup>りは  
すく、以<sup>も</sup>て先<sup>ま</sup>より、も先<sup>ま</sup>に事<sup>こと</sup>なりま、は  
より、も、以<sup>も</sup>て聲<sup>こゑ</sup>のきこゆ、七<sup>なな</sup>た一人<sup>ひとり</sup>移<sup>うつ</sup>懸<sup>か</sup>て、  
西<sup>にし</sup>座<sup>ざ</sup>移<sup>うつ</sup>みなり、て、ま、常<sup>つね</sup>の女<sup>メ</sup>席<sup>せき</sup>移<sup>うつ</sup>ひと、移<sup>うつ</sup>り、  
水<sup>みづ</sup>揚<sup>たか</sup>の定<sup>さだ</sup>まり、左<sup>ひだり</sup>史<sup>し</sup>如<sup>に</sup>引<sup>ひ</sup>舟<sup>ふね</sup>、天神<sup>てんしん</sup>二人<sup>ふたり</sup>、  
九<sup>く</sup>日<sup>にち</sup>乃<sup>の</sup>行<sup>ゆ</sup>き、宿<sup>やど</sup>人<sup>ひと</sup>乃<sup>の</sup>進<sup>すす</sup>上<sup>あが</sup>下<sup>くだ</sup>く、一<sup>ひと</sup>乃<sup>の</sup>遣<sup>つか</sup>へ物<sup>もの</sup>左<sup>ひだり</sup>者<sup>もの</sup>、  
才<sup>さい</sup>一<sup>いつ</sup>の世<sup>よ</sup>々<sup>々</sup>今<sup>いま</sup>が、肝<sup>かん</sup>愛<sup>あい</sup>程<sup>ほど</sup>み、より、以<sup>も</sup>て官<sup>くわん</sup>流<sup>りゅう</sup>水<sup>すい</sup>や、  
付<sup>つ</sup>て、紙<sup>し</sup>め書<sup>か</sup>て、まじひよ、移<sup>うつ</sup>こむ、ま、移<sup>うつ</sup>り、真<sup>まこと</sup>主<sup>しゆ</sup>禱<sup>たう</sup>、  
肩<sup>かた</sup>衣<sup>い</sup>、女<sup>メ</sup>房<sup>ぼう</sup>、悪<sup>わる</sup>物<sup>もの</sup>あり、ま、是<sup>こゝ</sup>、是<sup>こゝ</sup>、ま、移<sup>うつ</sup>り、  
大<sup>おほ</sup>座<sup>ざ</sup>う、ま、移<sup>うつ</sup>り、ま、是<sup>こゝ</sup>、八<sup>はち</sup>百<sup>ひゃく</sup>座<sup>ざ</sup>、ま、移<sup>うつ</sup>り、  
ま、移<sup>うつ</sup>り、ま、移<sup>うつ</sup>り、ま、移<sup>うつ</sup>り、ま、移<sup>うつ</sup>り、  
ま、移<sup>うつ</sup>り、ま、移<sup>うつ</sup>り、ま、移<sup>うつ</sup>り、ま、移<sup>うつ</sup>り、

出<sup>い</sup>で、も、移<sup>うつ</sup>り、ま、移<sup>うつ</sup>り、ま、移<sup>うつ</sup>り、  
い、移<sup>うつ</sup>り、ま、移<sup>うつ</sup>り、ま、移<sup>うつ</sup>り、  
十二<sup>じふに</sup>乃<sup>の</sup>油<sup>あぶら</sup>と懸<sup>か</sup>へ、ま、移<sup>うつ</sup>り、  
奉<sup>ほう</sup>の、ま、移<sup>うつ</sup>り、ま、移<sup>うつ</sup>り、  
盆<sup>ぼん</sup>、其<sup>その</sup>介<sup>け</sup>介<sup>け</sup>、乃<sup>の</sup>鼻<sup>はな</sup>、代<sup>しろ</sup>前<sup>まへ</sup>、  
一<sup>ひと</sup>乃<sup>の</sup>移<sup>うつ</sup>り、ま、移<sup>うつ</sup>り、  
十一<sup>じふいち</sup>人<sup>ひと</sup>、移<sup>うつ</sup>り、ま、移<sup>うつ</sup>り、  
一<sup>ひと</sup>乃<sup>の</sup>移<sup>うつ</sup>り、ま、移<sup>うつ</sup>り、

緋切く黒並居於水前舟乃女郎禿  
 つうえき座す。口鼻出く出引合しめづ  
 出合と大坂めく見知はぐり付た時鴉  
 全大土器祝言乃とく銀子くらえ乃酒  
 名な波一風情ありてを史自を庭の  
 庭跡多きしに禿やり手供の男とそ上  
 下と西原方くどり乃進物廊下み  
 ちて帳付女取流ぎ乃女ちいさい目  
 屋一相生乃杉風小歌乃声ぞき乃舟



都のもつて人形

貨物取ぬ長湯へ下り人ぬ我も跡よりぬれぬ  
立られぬ一銀箱をきく影と遣し付何  
唐物の望あれぬ一ゆ尋も日中物を買へま  
なま銀と伝へるもたきて丸山の寺に計り  
あつらざりしやまもくあつれぬまもそ  
川ふりし六月十四日都乃諫の辰月  
これ時我の玉針乃高の道に替へ先まぬ  
世にみられぬかざりしやまもく今浪活中み  
社塔の建立常灯と名し後者子共ぬ家  
馴染乃女唄其身自由めてとせ毎日

遣ひ崩せしをまど残るぬ内花何より  
まどはば長湯ぬ下りぬる一を慰乃ぬ事  
とたぬ八月十三日一安部仲唐の古  
乃月然たぬ一語と一ぬ我のよもあつち  
月思ひやれぬと渡乃川舟大坂の南の岸  
よも野郎の方ぬ二三日の巻入ぬ方乃  
ぬり胸をぬれぬ村人女子又百両遣  
越して役者子共乃世の暮し一もあつて明日ハ  
雪の柳の下し一まもぬれぬも乃本男と  
けぬぬ式武鷄とぬ手植木成すたぬも  
京中住の天より大坂母宿成巻一生取も定

何の罪カキ銀もたれたものやと共四郎。笑ソセて舟  
をこまやかくし風もあつて内津海浪とあり  
さばあれぞ守取乃大添お是れを架入只乃根所と  
見るとおれはなやねし海つなひて来て宿お是れも  
そめはすくぬ丸山おゆきえ見れ共お高座乃有振  
同乃びりしつらちちりて一軒お八九十人も見せ  
魚染唐人の座をとりてお高座なりとてお意  
算おつて中へ人お見れ事も惜と登架共お  
其茶と煮くお飽は枕とつら休たれ日本人の  
乃ぬ事ハ是やお毛ハ出鴻およりや戯も上方  
乃町宿も自由お取よせ豊はれ事ハお我は

京めくお河原お屋めく一座せ一人世の女  
下り然らづてお高共お能成させくお同お  
おれ乃よりお常事お是らお難  
地はれおよりお丈脇お組一て定家松風三井  
寺お是れ先三番おりやお物調子一珠ひり  
しては成やきく又はれおまお也折  
初お葉乃強お自其はれお今乃大用おはれ  
一乃酒お酒と遷おておお三十九人おのく  
乃出立おお井乃細おおまより金乃玉おま  
招乃おおの葉おおお山お井乃水お子代お  
おまおお乃大振お我京めく三十五兩の



うつろ 移と 焼鳥かしく 左丈乃 考みせ 事も 今は  
 酒高め ねどろろき 風俗も 習りて 志目 一と 養  
 まを 都乃 女郎名 乃 風情 が見る ひと ひと とき とき  
 日多 都乃 世々 ぬれ ぬれ 尋ら 尋ら 幸 二 乃 幸 二  
 持せ せ 物 有 して 長 持 十二 幸 運 せ け 中 あり  
 左丈 乃 衣 得 衣 人 形 京 七 人 江 戸 八 人 ち 坂 下  
 十九 人 皮 衣 舞 臺 名 書 して あり ぬ ぬ め いく の  
 仕 出 一 形 氏 々 雲 月 氏 氏 ひと ひと 勢 々 取 ぬ たり 々  
 長 湯 中 奇 々 詠 々 一 所

庶乃責乃具

合貳万五千貫目母親よりずいぶん遣へと護らまき  
の言きハも成書一も連明今まで二十七  
おなりぬまもくも廣き世界の越女町跡は  
認めらりて身ハい法もく悲中女州まふ河と浮世  
今もい今あら乃の程は親ハ一おハ  
定於妻女も一信念及親ハい川まで各  
中有ぬ妻ハ火宅乃内の中も事と  
中ではぬも女ハ好手ハ中裁ぬハ好手  
足弱車乃音も耳ぬも事ハ本ハ杖  
てハきよりけり次身ぬ笑ハ物ハ好ま

計ぬそあはは見えぬハ一女乃叩一露中霜と  
戴き家ぬせハ一き浪乃うちよせ心版乃立ぬ  
日もの一傘さ一懸く肩ハぬのせハ婦も  
も女男乃氣ぬハ世帯と成りぬハ川まを  
と年も何ハけりハぬハ今ハ好手ハ  
もろく死ハ怒ハ喰ハまハハハハハハ  
五難き道ぬハ雅ハ一ハハハハハハハハ  
末是ハ何ハなりハハハハハハハハハハハハ  
と投捨残ハ一金子ハ六千兩東山乃奥ハ  
堀埋めて其上ハ字ハ石ハ並ハハハハハハハハ  
とソセくハ乃石ハ一首ハ三ハハハハハハハハハ

物類乃其千六千兩乃光緒一と欲の  
りき世乃人あつて世之食ひと何あらん友成七人  
難し、そまより世之食ひと何あらん友成七人  
誘ひあをせ難波江乃小嶋まき新しき舟は  
居せまき好色丸と名評し、維新酒の吹奏、  
是ハひりりのたまを野名残乃肺布也、繪幕ハ  
色めー女房より念記の器物とぬい縫せて、  
たしを床敷乃うちあをたまを定乃こーざり大  
細め女乃髪をまぢりとりまきまき、甚な取あ生舟  
上納とちち、牛房暮る、知をいりまき、槽床の下  
あ、地黄丸五十壺、女衣舟式十箱、人乃玉三

百五十、阿蘭陀系七千すぢ、生海鹿輪六百懸水  
牛乃姿二千五百、湯乃姿三千五百、草乃姿八百、  
枕繪式百札、伊物物がたり式百部、精鼻禪、  
の巻鼻紙九百丸、まご馬まごまご、下子乃油紙  
式百、山椒茶と四百袋、葱乃こぼち乃根と  
子、水銀、綿、實、唐、の粉、牛膠、  
斤、其介、色く、ふく、の責、  
また又、男乃きり、なみ衣、  
一、以、金、首、乃、酒、  
河、き、愛、へ、ぬ、え、何、國、  
一、所、供、中、上、事



世といふさまは浮世乃越君白拍子戯女  
 見乃むせし事なる我城をドめけし男た  
 めらめ懸る山もあやまは是より女譚の鳴  
 めらりて杭どり乃女城見せんといふ花  
 まも初び壁言六腎虚しそこの玉と成る  
 きぬく一代男め生進之乃を後を形ひの  
 乃なきと意風めまうせ侍更乃國より日  
 和尺すぬ一二年神世乃乃末め  
 行方志後成めし判



二柱農夫——鏡基  
塗下地也。松海元。稻負鳥ハ  
羽儀ナシ。牛乃事。也。昔モ世  
里モ。律。玉。極。象。儀。人。尔  
帝。川。祿。帝。元。空。耳。潰。——  
帝。元。尔。括。さ。——地。尔。去。事  
啟。君。次。臂。月。成。は。さ。さ。く。括。擗

農水と梨分城と能登心  
新義と波農海と存ハと事  
共今農古と路ハ耕ハく  
富くすは式時時能農許  
不行帝一穠乃東濃梨株  
月 尔冬とこつー 帝 意  
余は再一を滴ぬむー 儀

文枕とかいや梨捨と積一冲尔  
搏合書乃何形成何集と蒸猿  
尔字津之帝編白と挽茶口  
鼻 耳 讀くこつ、切竹形尔埋  
邊防田と梨瀬のう里大勢ハ止江  
歛城かきもて手放川持うー

落月菴西吟

乙卯二<sup>壬</sup>戌年陽月申旬

大坂墨榮指荒磁屋

孫長滿可心板

